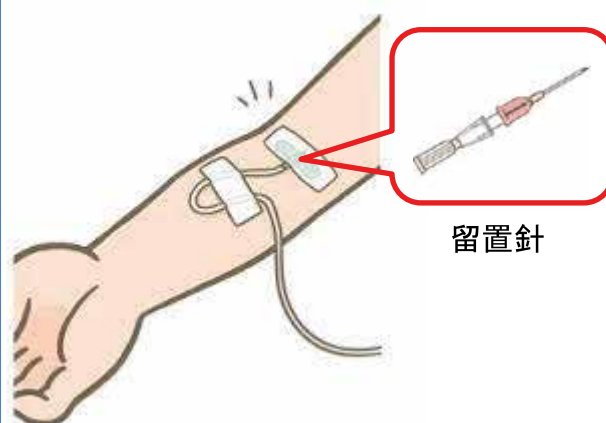


テーマ：ルート採血時に検体管と簡便に接続したい

■ 背景

- ルート採血では通常前腕部の静脈に留置針を設置して採血を行なった後に、点滴チューブをつないでいる。留置針を刺した状態で採血をする際には以下の課題がある
 - ①シリンジからスピッツ管などの検体容器へ移し替えるため、手間がかかる。
 - ②その際に血液が周囲に漏れることによる生物汚染リスク。
 - ③シリンジ内で血液凝固の恐れがあるため、速やかにスピッツ管などへ移すことが必要（気持ちがあせる）。
- 簡易かつ安全にルート採血を行なうためにも留置針と検体容器を直接つなぐことのできるような器具が望まれる。



<出典：看護roo!>

■ 現在の対応法

- ルートからシリンジで採血後、検体容器に移し替えている。

機能アイデア例

- ・ルートから直接採血できる機能（構造、形状）
- ・簡便で安全なもの
- ・通常採血と同様な手技が可能な機能
- ・血液凝固対策も必要

現在用いている真空採血管と留置針



■ 使用頻度や市場性に関する情報

- 2019年薬事工業生産統計によると採血又は輸血用器具の総生産高は約590億円、注射針及び穿刺針は約720億円に上る。
- 1日当たりの入院患者数は121万人と報告されている（2020年厚労省患者統計）。仮に1/10の患者さんへ留置針を用いての採血/輸液の点滴投与と仮定しても、日々10万人が対象と推定される、上記課題を改善した採血器具には大きな市場機会があると思われる。

■ 看護部ホームページ

<http://sumsnurse.es.shiga-med.ac.jp/>